

## 審査の結果の要旨

氏名 ラミチャネ カマル

論文題目：The Links between Disability, Education and Employment: A Study from Nepal（ネパールにおける障害と教育、雇用の連関に関する研究）

これはラミチャネの母国であるネパールを主たるフィールドとしつつ、先行研究がきわめて少ない発展途上国における障害者分野に取り組んだ研究であり、障害者の自立と社会参加に資することを目指した意欲的な研究である。この研究には次の三つの特筆すべき意義がある。1) 障害学・計量経済学・開発学等を融合させた「学際性」、2) ラミチャネ自身が障害のある（視覚障害）立場で研究しているという「当事者性」、3) 交通・通信・識字率などの諸条件のために調査・研究が従来非常に困難だとされてきた途上国の障害者に対し、400人を超える三つの種別の障害者（視覚障害、聴覚障害、肢体障害）に対面調査を実施したという「独自性」、という重要な意義を有している。

第1章では先行研究の整理と研究の目的を示した。ネパールを含めた発展途上国に関する障害者の社会・経済的状況についての先行研究はきわめて少数であり、とりわけ教育と労働の相関をめぐる研究が皆無であることを示した。次に、ネパールにおける障害者をめぐる歴史、法制度、社会・経済的状況、雇用、教育といった領域ごとに概況を整理した。そして、障害者を取り巻くこれらの分野における困難な現状を示すとともに、本研究がそうした困難を克服し、障害者の経済的自立と社会参加を推進する上で有用な知見を提供するものである、という研究の目的を示した。

第2章では研究方法を示した。カトマンズ地域在住の三つの種別の障害者（視覚、聴覚、肢体）421人に対して直接面接を行い、半構造化質問手法を用いて調査を実施した。さらに12人のケースについては、それとは別に詳細なインタビューも行った。分析手法は、量的研究法と質的研究法を組み合わせたものであり、計量経済学的知見と数値化が困難な社会・経済的要因の抽出の双方を目指した。

第3章では、調査結果を分析し、障害者における教育収益率について考察した。ここでは労働経済学におけるジェイコブ・ミンサーの理論に立脚し、人的資本と賃金格差の相関を説明するミンサー方程式を用いて、ネパールにおける

障害者の教育収益率、すなわち教育年限が賃金上昇に与える影響について解析した。その結果、教育収益率は19パーセントから32パーセントの範囲にあり、これはネパールを含めた発展途上国における障害のない一般の人の教育収益率（おおむね10パーセント）よりもかなり高い値であった。

第4章では、障害種別ごとに教育年限と就労の可能性、職種、雇用形態などの諸要因を分析した。その結果、教育年限は賃金に影響を与えるだけでなく、本人の就労意欲や仕事に対する満足度にも影響することを示した。

第5章では、障害者の教育年限が短いという問題の背景にある、ドロップアウトの問題を考察した。その結果、障害者に対する支援の不足や施設・設備の不備といった学校教育の制度的問題のほか、世帯の経済状況、さらに家族が抱く障害に対する意識が大きな影響を及ぼすことを示した。

第6章では本研究を総括した。ネパールにおいて障害者の教育収益率が一般の人以上に高いことを実証したことによって、障害者の経済的自立や社会参加を促進するために、不利な立場にある障害者へは、それゆえによりいっそう教育的取り組みに力をそそぐべきである、という結論を示した。

審査の結果、本研究は障害者が公的教育を受けることによって、社会・経済的諸条件が劇的に改善されることの学問的立証を、途上国をフィールドに行ったという点に新奇性が見いだされ、障害学、計量経済学、開発学を横断する学際的研究成果であるとともに、今後の展開も期待される有益な研究成果であると認められるため、学位授与に相当するという合意がなされた。

よって本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。